

益田市内中学生・高校生と職員との「対話の場」
～土木技術職員の担い手確保に向けて～

益田県土整備事務所 土木工務部土木工務第二課 課長 飯田善貴

1. はじめに

現在、島根県では、職員及び教職員の確保に向けて、様々な広報活動を行っている。総合土木職も例外ではなく、大学や高専等で説明会を開催しているが、なかなか応募が増えない状況。

本事務所では、ただ説明をするだけでなく、一步踏み込んだ活動が必要だと考え、直接学生たちと語り合う場を持つことで将来の選択肢の一つとなるようきっかけ作りのための活動を行った。今回は、その活動内容について紹介する。

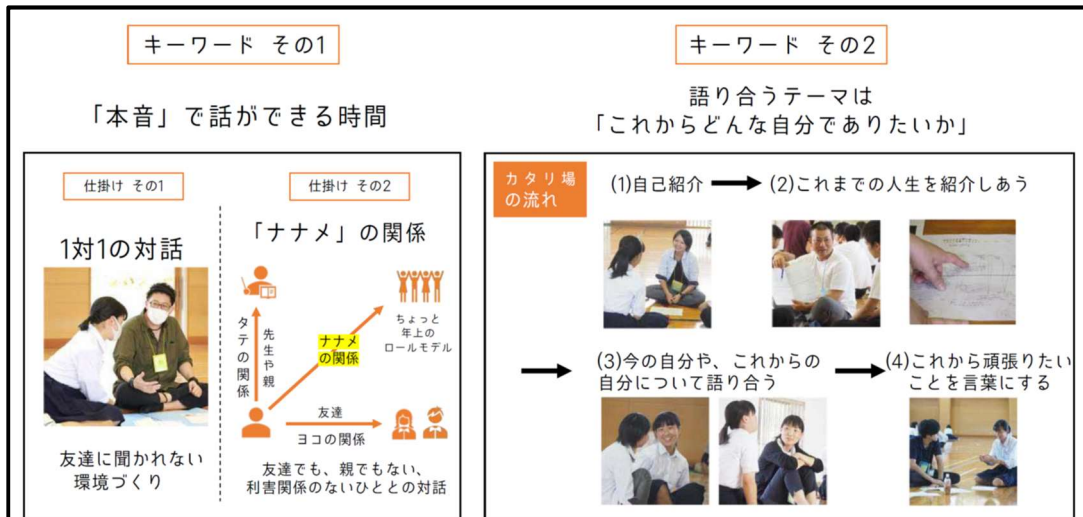
2. 「対話の場」を行うきっかけ（「益田版カタリ場」の存在）

「対話の場」を行うきっかけとなったのは、「益田版カタリ場」の存在が大きい。

「カタリ場」は元々高校生の意欲を引き出すことを目指したキャリア学習プログラムであり、2001年に認定NPO法人カタリバが設立され、高校生が大学生や社会人等「ナナメの関係」にあたる相手との対話を通して、「自分もこんな大人になりたい！」と思える出会いをきっかけに、将来への一步を踏み出せるよう全国各地で活動を行っている。

益田市に限らず地方の悩みは、若者が一度県外に出てしまうとそのまま帰ってこないため、人口減少が続いている状況。その原因の一つとなっているのが、近年のコミュニティ不足による「大人と語り合う場がない」ため地域の魅力が十分に伝えられず、地域でも働ける場があるのに若者が県外に流出していると考えている。

そのため、子供と大人が語り合うことで、子供が自分自身の生き方について考え、自分の心に火を灯し「将来この人と一緒に働きたい！」と思えるきっかけを作るだけでなく、地域の大人が元気になる、大人のつながりができることを目的として、益田市は2015年度から「益田版カタリ場」を開始しており、「小学生と高校生」「中学生と地域の大人」「高校生と益田の大人」というような、様々な方々を対象とし活動を行っており、昨年度は1468名の方が参加している。



3. 生徒と職員との「対話の場」

今回は、島根県立益田翔陽高等学校生物環境工学科の2、3年生、益田永島学園明誠高等学校2年生、益田市立高津中学校1年生と「対話の場」を行った。

益田翔陽高校では、環境土木コースの生徒17名を対象に、最初に島根県職員（総合土木職）の説明を行った後、5班に分け、その中に職員が入り生徒との対話を行った。

将来土木関係に就職したい生徒のため、様々な質問がありとても活発な話をする班ばかりであった。時には笑いを交えながらの対話で、お互いとても充実した時間となった。



高津中学校では、生徒が76名と大人数であり、ある程度テーマを持って対話を進めていく必要があるため、参加者には事前に益田市教育委員会及び高津中学校より説明があった。

「対話の場」の進め方は以下のとおりである。

- | |
|---|
| <p>3 対話交流活動Ⅰ（対話15分間→まとめ5分）
*内側の円：1グループ～生徒3～4名 全19班
*外側の円：県土整備事務所の方 19名
*お互いの自己紹介でスタート
*対話カードを使用可</p> <ol style="list-style-type: none">①影響を受けたひと②今の仕事をしているきっかけ③苦手をどう乗り越えてきたか④私の強みと弱み⑤小学生の時の自分に、今アドバイスするとしたら⑥これから挑戦したいこと⑦都会にはない「益田の良さ」⑧生きていくうえで絶対に捨てられないもの <p>…時計回りに生徒が移動</p> |
|---|

中学1年生は、まだ将来について決めていない生徒も数多くいると思われるが、中学生が高校の行き先を決めるきっかけは、小・中学生の時の出来事から、「〇〇になりたい！」と思

い進学する生徒が多い。そのため、中学生との対話はとても重要なことと考えている。

中学生に対しても、事前に島根県職員（総合土木職）の説明を行い「対話の場」を行った。周りにサポート役がいるため、対話が行き詰りそうになった場合もしっかりフォローしてもらい、途切れることなく対話を行うことができた。

生徒・職員ともに初めは緊張しながらの対話であったが、進めていくにつれ緊張もほどこけ、どの班も笑顔で対話を行っていた。



明誠高校では、益田市教育委員会主催、一般社団法人豊かな暮らしラボラトリー（通称「ユタラボ」）運営の「益田版カタリ場」に職員5名が参加した。「地域の大人」と「子ども」が対話する場であり、様々な職種の方が参加されていた。

この「益田版カタリ場」は、「人生グラフ」を使用し、大人が人生を振り返りながら語り合うことで、子どもたちもこれからどんな大人になりたいかを一緒に考えていくことが目的となっている。この「益田版カタリ場」を行うにあたっては、事前説明を受けた上で参加した。

対話は生徒と1対1で行った。ここでは、県職員の魅力を伝えていく、というよりは、生徒との対話そのものを楽しむ場であった。



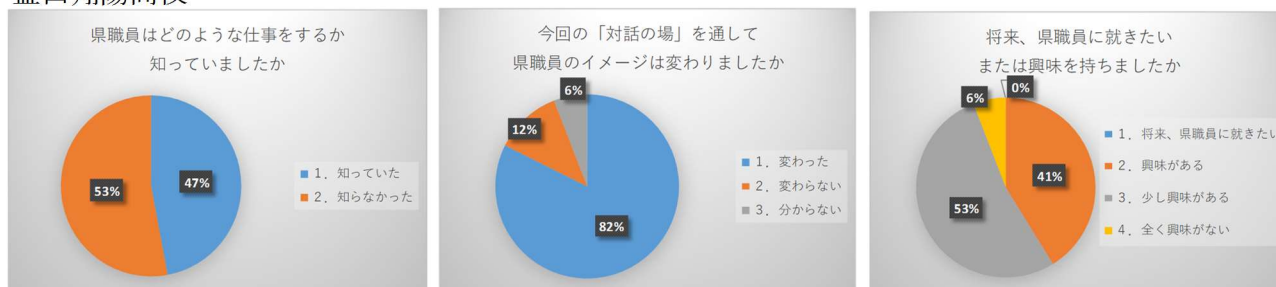
4. 活動前後の生徒の県職員に対する意識等

活動後、益田翔陽高校と高津中学校の生徒にアンケートを実施した。その結果は以下のとおりである。

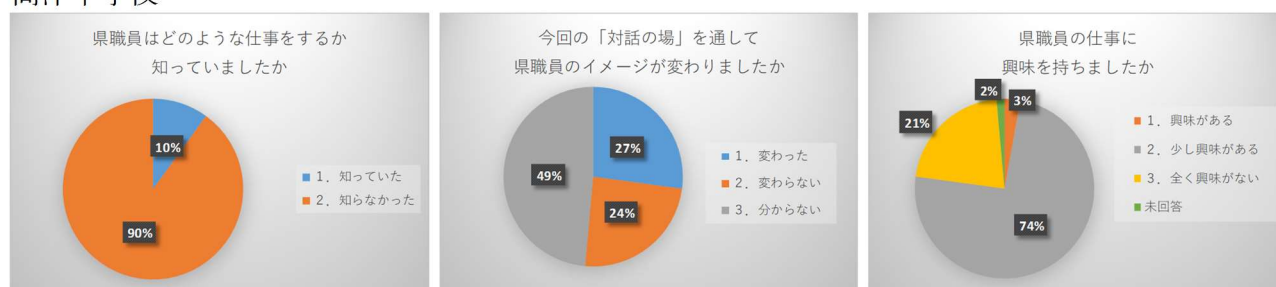
県職員の仕事について知らない生徒が高校生で約半数、中学生で9割であったが、説明会・対話を通し県職員のイメージが変わり、興味を持ち始めた生徒も見られた。特に、中学生は少しでも興味を持った生徒が約7割もおり、こういった活動を通して県職員のことを知ってもらうことが必要と感じたと同時に、県職員に対する認識の薄さ、PR不足を痛感した。

この活動に限らず人に何かを伝えるためには、「対話」はとても重要な「ツール」である。

益田翔陽高校



高津中学校



また、参加した職員に対してもアンケートを実施した。

「対話の場」については、中学生と話す機会もないため、良い経験となったという職員は多く、自己のコミュニケーション能力が鍛えられたという職員もいたが、中学1年生に県職員の魅力を伝えていくのは難しいとの意見もあった。また、自身が中高生の時にこういった機会がなかったため、「対話の場」に参加できる学生を羨ましく感じた職員もいた。

また、県職員の魅力を伝えていくための方法として「対話の場」以外であれば、という質問も行った。「対話の場」だけではどうしても伝わらないため、県職員の仕事内容を含めた学習会、現場見学会、職場体験、SNSの活用等を並行して行い、県職員の仕事が伝わる機会を増やすことが大事という意見があった。

5. おわりに

当然ながら、「対話の場」という初めて経験することであったが、相手に対して思いを伝えることの重要性、難しさが改めて分かった。しかしながら、今回参加した職員にとっては、この経験が地元への説明会や各種協議等に必ず活かされると感じている。

また、担い手確保を行うにあたり、現場見学会だけでなく県職員の紹介を行い、更に子どもたちと「語り合う」ことが大事だということも感じた。

この活動は、今回限りでなく、今後も続けていくべき内容であり、県内にこの活動が広がっていくことを期待している。